

郷の金額が最も高かった理由であろう。それは、私学校、西南戦争まで持ち越され、また、大津事件直前の西郷生存および帰国言説にまで、否、現代の「西郷どん」人気まで行きつくかもしれない。

歴史的に実に貴重な史料であるといえよう。金額が高いか、低いかは問題ではないのかもしれない。

参考文献

藤村泰夫監修『神奈川から考える世界史』えにし書房、2021年
 岩下哲典「徳川政権、文と武の相克—ペリー来航から明治維新への道—」同編『「文明開化」と江戸の残像』ミネルヴァ書房、2022年

(令和4年9月例会)

緒方家と森鷗外

石井 元章

文京区向丘の高林寺にある緒方洪庵の追頌碑文を明治45年に森林太郎(鷗外)が撰じたことはよく知られている。しかし、緒方家と鷗外の関係はそれだけに止まらず、当時のイタリア王国ヴェネツィア市に斃れた、洪庵の五男惟直が遺した娘、エウジェニア=ジョコンダ=豊が森を介して来日することになる。本発表ではその経緯を紹介する。

惟直は1876年11月から1878年3月までヴェネツィア商業高等学校領事科で学ぶとともに、日本語を教えた。その間ヴェネツィア生まれのマリア=ジョヴァンナ・セロッチェと恋に落ち、1877年9月10日に娘のエウジェニア=ジョコンダ=豊を授かる。壊血病に冒された惟直は1878年4月4日に妻の家で息を引き取るが、命の危険を察知した惟直はその4日前に受洗し、カトリック教徒としてマリア=ジョヴァンナと正式に結婚していた。4月6日に日本人として唯一サン・ミケーレ島記念墓地に埋葬された惟直の墓は、この時点では共同溝であった。

一方、商業高等学校第4代日本語教授は岩手県一関田村藩出身の長沼守敬で、彼は1881年から1887年までヴェネツィア王立美術学院で彫刻を学び、帰国後に東京美術学校に奉職する。長沼は1884年の終業式において賞賛を受け、その技倆を見込んだ日本名誉領事グリエルモ・ベルシェが、惟直の墓の制作を長沼に依頼する。惟直の遺体は1884年12月22日に共同溝から掘り起こされ、完成した大理石墓に移された。

長沼は、帰国前に日本人の知己を頼って1886年にヨーロッパを周る。最初の訪問地ミュンヘンで7月15日に同市留学中の森鷗外と会った時に、洪庵の六男取次郎の同級生森は長沼に惟直のことを尋ね、長沼はその娘についても告げる。森は驚き、その情報を早速大阪の取次郎に伝える。1889年からドイツに留学した取次郎は、名誉領事ベルシェを介してやっと姪の消息を掴み、マルセイユに來させたらうえ、日本へと連れ帰る。

(令和4年9月例会)

緒方家に迎えられた エウジェニア=ジョコンダ=豊の生涯

緒方 洪貴

エウジェニア=ジョコンダ=豊は緒方洪庵の第

10子である惟直(十郎)とイタリア人のマリアの

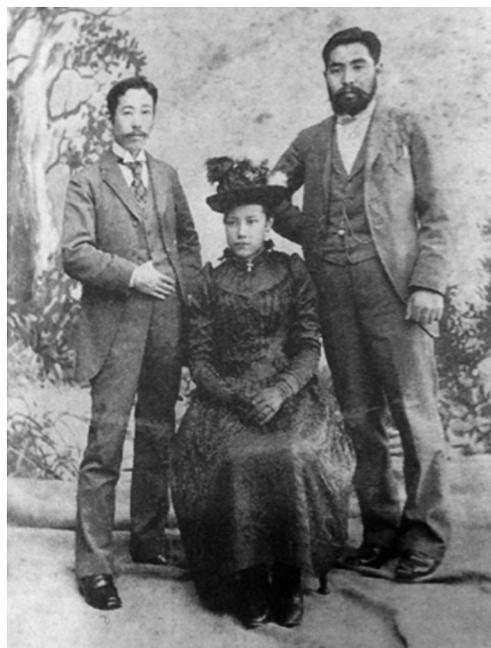
娘である。惟直はイタリアに留学、1876年にはヴェネツィアにおいて日本語教授として教鞭を執っていた。惟直はマリア・ジョヴァンナ・セロティと出会い、1877年9月10日に豊が誕生する。翌年、惟直は25歳で壊血病にて永眠（サン・ミケーレ島に眠る）、その後マリアも亡くなったため豊は祖母に育てられていた。

惟直の兄弟達はイタリアに惟直の娘が残されていることを知り、緒方取二郎と緒方正清は豊を迎えにヴェネチアまで訪れ、日本に連れ帰った。豊が14歳の時である。

緒方家に迎えられた豊は最初、適塾に住んでいた。豊は梅花女学校に通い日本語を学び日本文化に馴染めるよう努力した。その後、加陽家より光太郎を養子として迎え緒方家の一員として2男4女の母として逞しく生き90歳で亡くなった。

以下は、私自身（緒方洪庵から7代目）が血縁者に行ったインタビューの一部である。『豊は日本文化に馴染もうと努力したが、当時としては珍しくパスタをうどんより好み、孫たちを出迎えるときは「だっこ」ではなく「ハグ」をして「頬ずり」ではなく「キス」をする』という西洋の風習も当然持ち合わせていたようだ。また当時は混血（ハーフ）が珍しかったため奇異の目で見られ苦勞も絶えず、六甲の教会に通い心の拠り所にしてきたようである。

血縁とはいえ知らない日本人が突然自分のもとに現れて、日本に連れ帰られ一緒に暮らすという



左から緒方取二郎、豊、緒方正清

のは14歳の少女にとって大変な恐怖と不安であったことは想像に難くない。豊が素直にそれに応じたのか、あるいは嫌だったが仕方なく日本に行く決断をしたのかは分からない。しかし、その時の勇気がなければ、私はこうして日本医史学会で発表する機会もなければ生まれてもいないと思うと感慨深い。

（令和4年9月例会）

研医会図書館の蔵書案内

安部 郁子

研医会図書館は、眼科資料の図書館として知られているが、実はその書庫には眼科以外の書籍も多く、今回はそうした研医会の所蔵本についてご案内したい。

ご紹介の手がかりとして、2006年から2019年にかけて行なってきた本の展示会のリストを見ていただき、どのようなジャンルの書籍・資料があ

るのかをお知らせする。以下は、その展示会のタイトルである。

- | | |
|--------|--------------------|
| 2006年春 | 明治人の教科書 |
| 2007年春 | 江戸の特産品開発 本草学と博物学の本 |
| 2008年春 | 幕末から明治の翻訳医書 |